

平成30年6月17日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370574

研究課題名(和文) ウェールズ英語とスコットランド英語における反方言化の進行とアイルランド語の影響

研究課題名(英文) Celtic influence on Welsh and Scottish accents of English and the dedialectalization in the regions

研究代表者

三浦 弘 (Miura, Hiroshi)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：00239188

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：各英語方言の現在の音韻体系を記録し歴史的に考察するために、アイルランド語(ケルト語)の影響を受けているイギリスとアイルランドの英語方言について現地で被験者を集めて音声を録音し分析した。収録地はウェールズ3地点、アイルランド2地点、コーンウォール4地点である。考察には前回の科研費による収録のスコットランド6地点と平成29年度からの科研費によるマン島とリバプールで収録した音声も利用した。英語音声学のためのフィールドワークを効率よく行う方法、つまり、現地で適切な被験者を集める方法、及び調査のための音読用語彙リストに含める単語を取捨選択する判断力も向上し、複数の新発見につながった。

研究成果の概要(英文)：From original recordings made on field trips to Britain and Ireland, the present-day distribution of the sounds of each Celtic accent of English was reported. Three local accents of South Wales English, two local accents of Irish English and four local accents of Cornish English were recorded. The data were compared with previous recordings of six local accents of Scottish English and the recordings of local accents of Manx English and Scouse sponsored by another JSPS KAKENHI from 2018. Several new findings were appeared through this research. The researcher also acquired the better skills to recruit suitable subjects for the recordings and to select words of the reading list for recordings.

研究分野：英語音声学

キーワード：音声・音韻 英語方言 発音変種 音声分析 ウェールズ英語 スコットランド英語 アイルランド英語
コーンウォール英語

1. 研究開始当初の背景

(1) 前回、平成 23 年度～25 年度科研費基盤研究(C)「スコットランド英語の発音変種調査」では、スコットランド標準英語(イングランド南部から伝わった英語)、スコットランド各地の英語方言、及びスコットランド語(古英語からスコットランドで独自の発達をしたスコットランドの伝統的な英語)の音韻とイントネーションを研究した。スコットランド各地で被験者を集めて音声の収録調査を行い、反方言化(標準語化)が急速に進行していることを実感した。また、スコットランド各地の英語には、母音長や音調にゲール語(アイルランド島から伝わったスコットランドのケルト語、アイルランド語)の影響による共通の特徴があることがわかった。

(2) スコットランドとマン島には 5 世紀にアイルランド島からアイルランド語が伝わったと言われている。アイルランド語は紀元前 10 世紀頃にガリア語(大陸ケルト語)が直接アイルランド島に渡ったものというのが定説である。一方、ウェールズ語とコーンウォール語は、ローマ人(1～5 世紀)やアングロサクソン人(5 世紀以降)がブリテン島にやって来る以前からブリテン島で使われていたケルト語である。今から 3000 年前にはほぼ同一であったケルト語が、アイルランド島系のゴイデル語とブリテン島系のブリトン語となり、両島の主言語が英語に変わる過程で、昔のケルト語が現在も各英語方言に独自の影響を与えていることに注目した。

2. 研究の目的

(1) アイルランド語(ケルト語)の影響を受けている各英語方言の発音について、現地録音調査を行い、音声分析をして得られるデータから現在の当該英語方言が実際にどのように発音されているのかを記録公表し、現在進行中の各英語方言の変化について、アイルランド語との言語接触による歴史的な音韻変化過程、及びイギリス全土に広がりつつある反方言化という 2 つの視点から考察することである。

(2) 過去の調査では大学や研究所に協力を依頼して被験者を募集したために、被験者が学生であったことも多く、なまりの強い英語の地域方言(基層方言)がなかなか収録できなかった。そのため今期の調査では公的機関等へ働きかけて、地元住民、それも最大限に方言を保持している高齢者を被験者としたフィールドワーク(実地踏査)の方法を確立することである(中間報告はオープンアクセスの三浦 2017、REPL 9 ⑤に発表した)。

3. 研究の方法

(1) 現地収録に先立って、可能な限りの先行研究(参考文献)を入手して、予測(仮説)も含めて音読用の語彙リストを作成した。比

較考察のためにリストの中にはできるだけミニマルペアとなる語を散りばめた。語彙リストの単語数は、英語音声学研究で標準的に用いられる「標準語彙セット」の 72 語に加えて、各地域別に約 80 語を自ら選択して加え、単語だけで約 150 語となった。各単語は同一のキャリア文(ターゲットとなる単語の母音に第一強勢が付与されるような枠組み文: Say _____, please.)に入れて 2 回ずつ被験者に音読してもらった。音声分析には 2 回目の音声を使用した。現地収録ではさらに 7～8 文の 2 回ずつの音読と 4 分間程度の自然な会話の録音もしたので、各被験者の収録には約 1 時間かかった。

(2) 現地録音で大切なことはどのようにして適切な(現時点で最もなまりの強い地域方言を保持している)被験者を見つけ出し、最適な音声を録音するかということである。大学や研究所のみならず、福利厚生団体(英国在郷軍人会、ダブリン・バス会社退職者ボーリングクラブ、ペンブルック発電所社交クラブ等)、公立図書館、公立博物館等に協力を依頼し、同時に知り合いの研究者から友人や知人、あるいは親類を紹介してもらった。

(3) 地元住民からなまりの強い音声を収録するときには、大学の録音室ではなく、住民の自宅や図書館の会議室、場合によってはレストランのテーブルや公園のベンチでの録音となる場合が多い。そのため、高性能の IC レコーダーとプラグイン・マイクロフォンを利用した。語彙リストの単語は 15 語程度を一つのグループとして音声ファイルが分割できるように分けて録音をとったが、うまく録音されない場合もあるので、バックアップのために予備の IC レコーダーを常に録音状態にしておく必要がある。

(4) 音声分析には主に Praat Ver. 6.0.21 (Boersma and Weenik 2015)を使用した。測定したフォルマント周波数をもとにして音響的母音空間図を作成したり、R 音化母音の程度を分析したりした。分析結果を考察する時のために、個人情報の取り扱いには注意しながらも、被験者には「質問票(個人情報記入用紙)」に年齢や出身地のみならず、できるだけ多くの個人情報(現在に至るまでの居住地や職業遍歴、両親の出身地、ケルト系言語の熟達度等)を記入してもらった。これらの情報が考察の際に非常に役立った。

4. 研究成果

(1) ウェールズ英語

ウェールズでは首都カーディフ、カーディフの北北東 10 キロにあるポンティプリーズ(現在の高齢者が生まれた頃にはまだウェールズ語(ブリテン島のケルト語)が今よりも多く話されていた)、そして中世の時代からイングランドの植民地であり、英語がこの

地域の共通語として話されていたペンブルックで調査を行った。

すべての被験者の母音の第1フォルマントと第2フォルマントの周波数を計測し、図1と図2のような音響的母音空間図を作成し、表1のように現在の各母音音価を見極めて発表した。

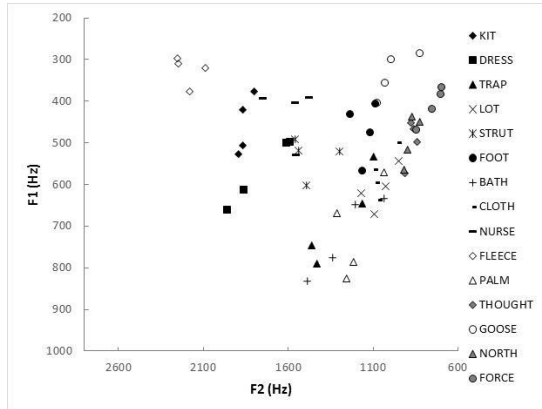


図1 ポンティプリーズの単一母音 (男性)

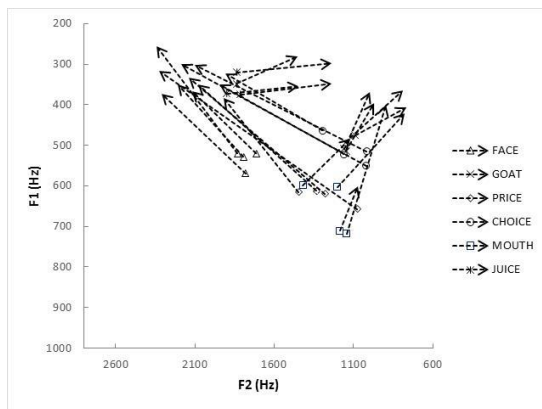


図2 カーディフの二重母音 (男性)

	Pontypridd	Cardiff
FACE	ei ~ ɛi ~ e	ɛi ~ ei
GOAT	ou ~ o ~ ɔu	ou ~ əu ~ əu
PRICE	ɹi	ɹi
CHOICE	ɔi ~ əi	ɔi ~ oi
MOUTH	ɹu ~ əu	ɹu ~ əu ~ əu
JUICE	iʊ ~ iʊ	iʊ ~ iʊ

表1 ポンティプリーズとカーディフの二重母音

さらにウェールズ英語独特の二重母音 [ɪʊ] に注目した。ウェールズ英語ではウェールズ語の影響で *juice* の母音が [u:] ではなく [ɪʊ] となる。図3のような [ɪʊ] と [u:] のミニマルペア (最小対語) の母音を示す母音空間図を作成した。その地域のウェールズ語の影響の度合いに応じて、あるいは、英語の新しい変異傾向によって、別の母音音素をもつ語に現在の程度 [ɪʊ] が用いられているのかを3地点のデータから考察した。20世

紀前半までウェールズ語が身近で使用されていたポンティプリーズでは、この二重母音が多く使われる傾向があった。イングランド化 (英語化) が早期に生じたペンブルックでは、男性の発音はイングランド南部の英語とほとんど差異が見られなかったが、女性被験者は、高齢者が見つからなかったために、比較的若いということもあったが、多くの語 (*new, through, too, two, sued, suit* 等) にこの [ɪʊ] という二重母音を使用する新傾向が見つかった。ウェールズで収録した音声はさらに TRAP 母音、BATH 母音、PALM 母音の音価を比較して特徴と分布状況を考察したり (TRAP 母音と BATH 母音の音価は同一であるが、明確に持続時間は異なるので、音素の対立は保持されている。BATH 母音は長母音)、同じブリテン島のケルト語であるコーンウォール語の影響を受けたコーンウォール英語との比較を行ったりした。

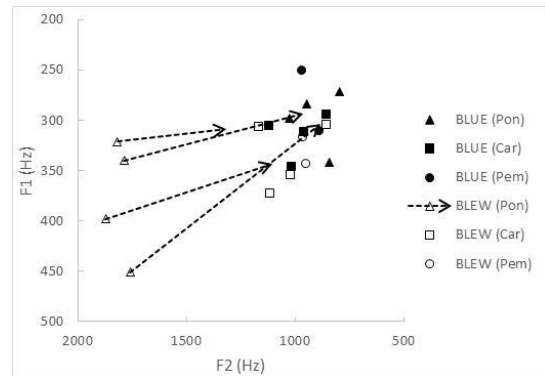


図3 blue 対 blew 母音_ウェールズ3地点の男性

(2) スコットランド英語

スコットランド英語に関する考察は前回の科研費によるグラスゴー、エディンバラ、オークニー、シェトランドでの収録音声の再分析を行った。スコットランド英語のイントネーションの特徴を考慮したイントネーション表記法を提案したり、子音 L の音声実現 (常に軟口蓋化した「暗い L」になるという定説が正しくないこと) を分析したり、二重母音の第一要素と第二要素の持続時間比率を音響的に分析して、母音の長短を区別する環境が他の方言とは異なる (後続子音による) ような声帯振動効果が二重母音にも生じていて、二重母音の第一要素と第二要素の持続時間比率の差異がスコットランド英語の重要な特徴の一つであることを示した。また、[z] の前という環境がスコットランド英語の二重母音の第二要素を長める要因となる場合が多いという新発見を報告した。

(3) アイルランド英語

アイルランドではまず首都ダブリンにある専修大学国際交流提携校のダブリン大学トリニティカレッジに協力を依頼し、ダブリン英語方言話者を会議室に集めてもらった。アイルランド英語はアイルランド語の影響で子音が軟音化 (口蓋化) する傾向があるこ

とが知られている。ダブリン英語方言は特に破裂音の軟音化（摩擦音化）が顕著である。

被験者は市民講座の受講者や大学職員であったが、ダブリン出身者は少なく、代わりにティローン、メイヨー、コーク、ウォーターフォード等アイルランド各地の出身者が集まり、結果的に母音の比較考察に有益であった。

また、アイルランド語が周辺地域で使用されているアイルランド南西端のケリー州キラニーの町を訪れ、公立図書館が見つからなかったために公園や教会で高齢者に声をかけて調査協力を依頼し、キラニー英語方言の収録を行った。

アイルランド各地の英語方言の母音空間図を作成し、ウェールズ英語同様に考察した。図4はダブリンの単一母音、図5はキラニーの単一母音を示している。特徴的な相違はキラニー方言にはNORTH母音とFORCE母音の明確な対立が見られることである。NORTH母音の方が広母音である。キラニー方言ではGOOSE母音は奥舌母音であるが、ダブリン方言ではGOOSE母音の前舌化が進行している。

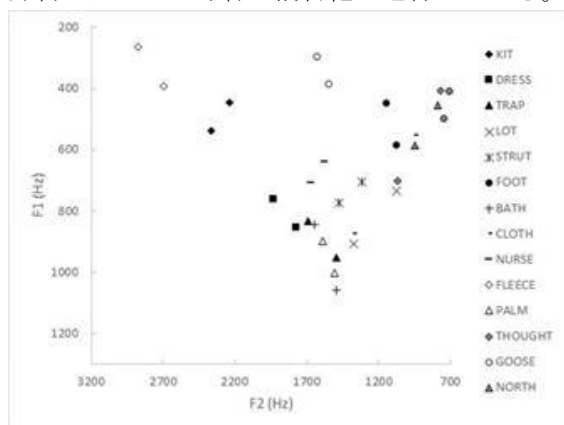


図4 ダブリンの単一母音（女性）

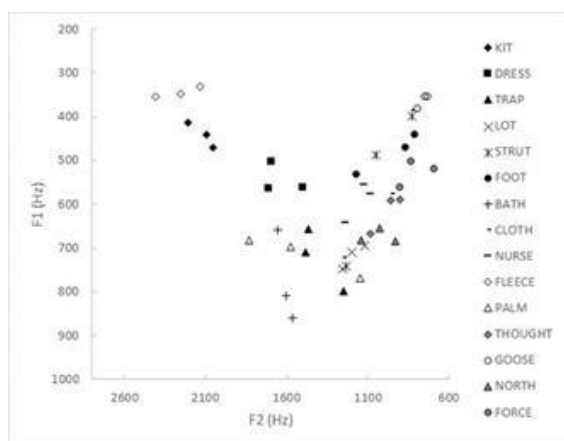


図5 キラーニーの単一母音（男性）

アイルランド英語各地の方言（被験者）の音声から R の前の母音を NEAR 語群、SQUARE 語群、START 語群、NORTH 語群、FORCE 語群、CURE 語群に分類して音声分析し、母音空間図を作成して考察した。Wells (1982: 421) に

よれば、NURSE 母音と SQUARE 母音の融合はダブリン方言の特徴であり、過剰矯正が原因とのことであるが、ダブリン方言以外でもティローン出身の被験者にこの特徴が見られたことは興味深い。

R の前の母音では母音の調音中に R の調音が始まることがある。そのような R 音化母音のサウンドスペクトログラムをさらに分析した。R 音化母音の R 音性は母音の第3フォルマント (F3) 周波数を下げるので、母音+Rの発音の持続時間中における F3 の推移を調べた。20%経過時点と 80%経過時点の F3 値を計測して、被験者ごとに図6と図7のようなグラフを作成して考察した。早い時点で R 音化、つまり、母音と R が融合していれば、20%時点の F3 値は小さくなる。ダブリン方言では NURSE 語群の母音だけが R 音化し、その他の語群では母音と R の融合は生じておらず、別々に発音されていた。キラニー方言には母音と R の融合は全く見られなかった。

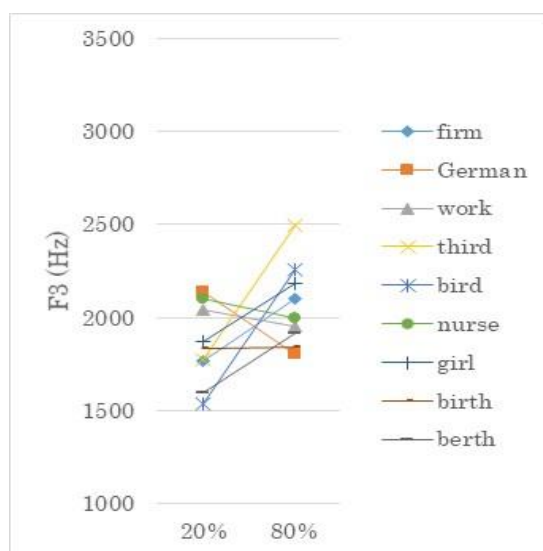


図6 NURSE 語群の F3 値の推移_ダブリンの女性 1

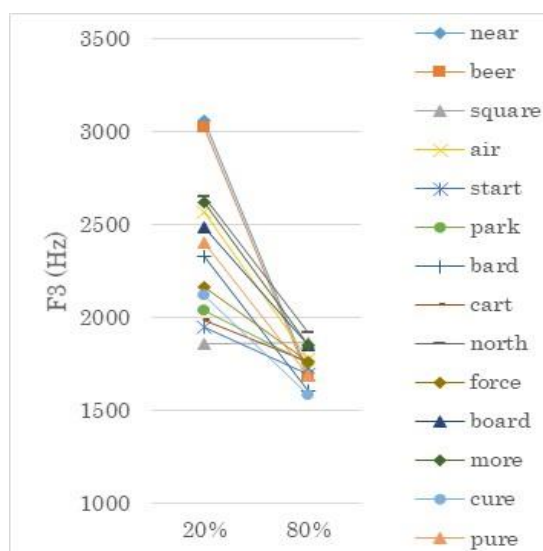


図7 その他の語群の F3 値の推移_ダブリンの女性 1

(4) コーンウォール英語

英国コーンウォール州の調査では英国在郷軍人会 (Royal British Legion, RBL) コーンウォール本部が被験者募集をしてくれた。4つのRBL支部に協力してもらい、ルー、トゥルロー (州都)、ヒームア、マウズルで収録し、4つのコーンウォール英語方言が分析できた。

コーンウォールでは18世紀後半まで、コーンウォール語という、ウェールズ語と同系のブリテン島系ケルト語が使用されていたが、最後の母語話者とされているドリー・ペントリースさんが1777年に他界した後、消滅したというのが通説である。ペントリースさんの住居は調査地点の1つ、コーンウォール南西端のマウズルにあった。

コーンウォール英語の分析はウェールズ英語のデータと比較しながら行った。ウェールズ英語の二重母音 [ɪu] がコーンウォール英語でも一部用いられていることを発見したことは特筆に値すると思われる。明らかにアイルランド語の影響が残ったものである。当初スコットランド高地地方の調査を予定していたが、その予算と時間をコーンウォール地方の調査に変更して良かったと思う。

コーンウォール英語では、ウェールズ英語のように *juice* の母音が [ɪu] となる被験者はいなかったが、コーンウォール南西部のヒームアとマウズルの被験者は全員、*blew* と *threw* の母音を [ɪu] と発音していた。つまり、*blue* 対 *blew*、*through* 対 *threw* という、[u:] と [ɪu] の音素対立があった。コーンウォール南西部の英語方言にも /ɪu/ という二重母音の音素が見つかった。

このことを2017年10月の第3回国際英語音声学大会で報告したところ、イギリス人研究者から、自分たちはイギリスの英語方言を調査し尽くしたつもりだったが、常にフィールドワークを続けることの重要さがわかった、という賛辞のコメントをもらった。

(5) マン島英語とリバプール英語

マン島とリバプールでの調査費用は平成29年度からの別の科研費から支出したが、英語方言へのアイルランド語の影響という一連の流れを受けたものである。

アイルランド島系ケルト語であるマン島語は44年前の1974年にネッド・マドレル氏が亡くなった後、マン島語の母語話者がいなくなったと言われている。マン島博物館の学芸員からの紹介で、4日間で島内各地の9人の高齢住民宅を訪問したところ、3名が英語とのバイリンガルではあるが、マン島語を流暢に話せる被験者だった。分析の結果、マン島に伝わった英語はイギリスの標準英語 (イングランド南部英語) ではなく、イングランド北部英語であることもわかり、アイルランド語の影響も母音音価に現れていた。

リバプールはイングランド北部に位置し、アングロサクソン人の中でもアングル族の

西ゲルマン語 (古英語) 方言が発達したイングランド北部英語方言地域である。

リバプール英語方言は、FOOT母音とSTRUT母音の分裂が生じていない、つまり、*strut*, *cut*, *but* 等の母音を *foot* と同じ [u] と発音する典型的なイングランド北部英語の使用地域である。しかし、19世紀中頃、1845~47年のアイルランド飢饉の時に対岸のアイルランドから数十万人が移民としてリバプールに移住したため、リバプール英語の発音には新しいアイルランド語の影響が生じた。特に子音の軟音化が顕著となり、リバプール英語方言は「スカウス」と名付けられた。

マン島では北部よりも南部にマン島語の影響が強く、リバプールでは労働者階級がスカウスを話し、中流階級はマーゼサイド州の北部英語を話していることがわかった。

<引用文献>

①Wells, J. C. (1982) *Accents of English* (3 vols). Cambridge: Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計12件)

①三浦 弘、勝田 浩令、アイルランド英語諸方言におけるR音化母音の分布特徴、日本実験言語学会誌『実験音声学・言語学研究』(REPL)、査読有、10号、2018、pp. 30-44、<http://www.jels.info/REPL10.html>

②三浦 弘、勝田 浩令、英語3方言の/ɪ/の異音特徴、日本実験言語学会誌『実験音声学・言語学研究』(REPL)、査読有、10号、2018、pp. 45-54、<http://www.jels.info/REPL10.html>

③三浦 弘、The Vowel Qualities and Lengths of the TRAP, BATH and PALM Lexical Sets in Local Accents of Cornish and Welsh English、日本英語音声学学会誌『英語音声学』、査読有、22号、2018、pp. 17-26

④三浦 弘、アイルランド英語諸方言の母音音価、日本英語音声学会中部支部学術論文集、査読有、6号、2017、pp. 19-26

⑤三浦 弘、フィールドワークの試行錯誤、日本実験言語学会誌『実験音声学・言語学研究』(REPL)、査読有、9号、2017、pp. 131-138、<http://www.jels.info/REPL09.html>

⑥三浦 弘、ウェールズ英語とコーンウォール英語における二重母音 [ɪu] の分布と音価の相違、日本英語音声学会誌『英語音声学』、査読有、21号、2017、pp. 363-371

- ⑦三浦 弘、スコットランド英語の二重母音における母音長規則とフォルマント推移の型、専修人文論集、査読無、98号、2016、pp. 237-267、『英語学論説資料』50号(2018)に採録、
http://ir.acc.senshu-u.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=9976&item_no=1&page_id=13&block_id=52
- ⑧三浦 弘、ウェールズ英語における対比二重母音/iu/の後退、日本英語音声学会誌『英語音声学』、査読有、20号、2016、pp. 45-53
- ⑨三浦 弘、Phonemic Variations in South Wales English Vowels、専修人文論集、査読無、97号、2015、pp. 141-160、『英語学論説資料』50号(2018)に採録、
http://ir.acc.senshu-u.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=9387&item_no=1&page_id=13&block_id=52
- ⑩三浦 弘、ウェールズ南部英語におけるTRAP-BATH-PALM母音の社会言語学的変異、日本英語音声学会中部支部学術論文集、査読有、4号、2015、pp. 31-40
- ⑪三浦 弘、グラスゴー英語の音調とToBI表記法、日本英語音声学会誌『英語音声学』、査読有、19号、2014、pp. 97-105
- ⑫三浦 弘、勝田 浩令、スコットランド英語二重母音のフォルマント軌道変遷に基づく地域変異の考察、日本英語音声学会中部支部学術論文集、査読有、3号、2014、pp. 17-29
- [学会発表] (計13件)
- ①三浦 弘、マン島英語北部方言と南部方言の発音比較、日本英語音声学会第28回中部支部研究大会、2018、犬山館(愛知県犬山市)
- ②三浦 弘、マン島英語発音の由来—現地録音音声の分析から—、日本英語音声学会第19回関西・中国支部研究大会、2018、県立広島大学広島キャンパス
- ③三浦 弘、リバプール方言の音声特徴—ジョン・レノンの南部とジェイミー・キャラガーの北部を対比して—、日本英語音声学会第27回中部支部研究大会、2018、名古屋学院大学日比野学舎
- ④三浦 弘、The vowels of the TRAP, BATH and PALM lexical sets in Cornish and Welsh

English、日本英語音声学会第22回全国大会兼第3回国際英語音声学者大会、2017、西南学院大学

- ⑤三浦 弘、勝田 浩令、アイルランド英語諸方言におけるR音化母音の特徴と分布状況、日本実験言語学会第10回大会、2017、専修大学神田キャンパス
- ⑥三浦 弘、アイルランド英語ダブリン方言とキラニー方言の音声特徴、日本英語音声学会第26回東北北海道支部研究大会、2017、岩手県立大学アイーナキャンパス
- ⑦三浦 弘、コーンウォール英語母音の特徴、日本英語音声学会第25回中部支部大会、2017、愛知学院大学大学院 栄サテライトセンター
- ⑧三浦 弘、The allophonic differences of [iu] between Cornish and Welsh accents of English、日本英語音声学会 第15回九州沖縄四国支部研究大会、2016、高知大学朝倉キャンパス
- ⑨三浦 弘、英語音声のフィールドワーク、招待講演、日本英語音声学会 第21回全国大会、2016、早稲田大学大隈小講堂
- ⑩三浦 弘、ウェールズ英語の二重母音 /iu/ について、日本英語音声学会 第20回全国大会、2015、呉工業高等専門学校
- ⑪三浦 弘、ウェールズ英語3方言の母音の特徴と相違、日本英語音声学会 第23回中部支部大会、2015、諏訪市文化センター
- ⑫三浦 弘、スコットランド英語母音の持続時間—音響ダイアグラムによる音韻法則へのアプローチ—、日本実験言語学会第7回大会、2014、専修大学サテライトキャンパス
- ⑬三浦 弘、グラスゴー英語のイントネーション、日本英語音声学会第19回全国大会、2014、大分県立看護科学大学

[その他]

専修大学研究者情報データベース

(研究者紹介)

<http://reach.acc.senshu-u.ac.jp/Nornir/search.do?type=v01&uid=1205421>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三浦 弘 (MIURA, Hiroshi)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：00239188